

平成23年(2011年)
4月29日

特集号

発行

三齋流九曜会

会長 小林祥泰

事務局 出雲市今市町53

三齋流 九曜会だより

三齋流家元道統の

継承式 を挙行する 祝賀会



細川護熙様の乾杯の御発声

菊花薫る平成二十二年十一月

二十日、県都松江市のホテル一畑において細川護熙様・佳代子様御夫妻・細川護光様・建長寺管長・永源寺管長・中宮寺御門跡様をはじめ、溝口善兵衛島根県知事様等多数の御来賓の御臨席を仰ぎ、また多くの九曜会会員の出席により約四百名の参列を得て三齋流家元道統継承を祝う継承式並びに祝賀会、記念呈茶会が厳粛かつ盛大に開催され、参会者一同新しい家元の継承を慶び、祝った。

継承式

- 開式のごとは
- 細川護熙様・佳代子様御夫妻ご入場
- 建仁寺管長小堀泰巖老大師以下ご入場
- 家元道統継承の儀 道号授与
- 献茶・法要 大般若読経
- 細川様御夫妻ご退場
- 建仁寺管長小堀泰巖老大師以下ご退場
- 閉式のごとは

道統継承の式典は、午後五時からホテル一畑平安の間において挙行された。

三齋流家元継承の儀は、細川家御当主細川護熙様お立ち会いのものに行われ、家元道統継承の授与と道号の拝受が、小堀泰巖老大師によってなされ、二十一代(観翠庵四代)森山宗浦(斗南)家元が誕生した。

次いで、新しく家元を継承した宗浦家元の初のお点前が特設された正面の祭壇において披露された。静寂で厳粛な雰囲気の中で流れるような献茶のお点前が粛々として行われ、佛前へ献上された。

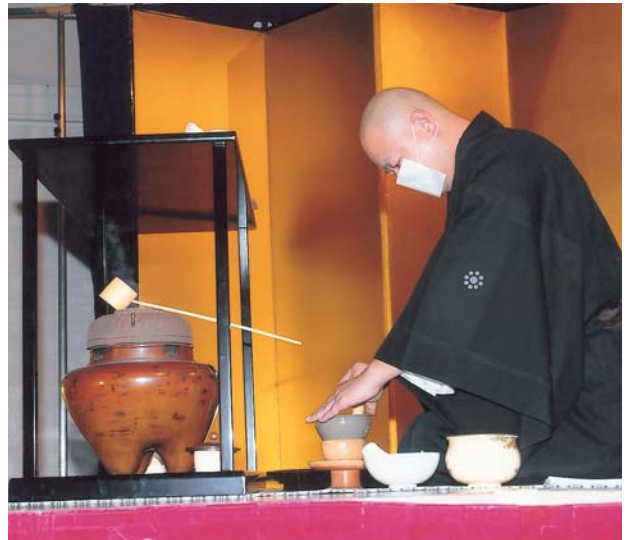
続いて、小堀泰巖老大師及び建仁寺の十名の和尚様方の大般若読経によって法要が営まれたが、宗浦家元も加わっての力強い気迫に満ちた読経で参会者を圧倒、その迫力ある読経に三齋流の明るい前途を感じ取ることができ、一同感動した。

厳粛な雰囲気の中に、実に力強さと気迫にあふれた道統継承式は参会者に大きな感動を与え、午後六時に終了した。

三十分間の休憩時間となり参会者は、控室と継承記念呈茶席へ移動して呈茶を楽しみ、暫し歓談の時をもった。



家元道統継承の儀



宗浦家元の献茶点前

祝賀会

- 開式のことば
二十代家元 森山 宗育
- 挨拶
建仁寺管長 小堀泰巖老大師
表千家堀内長生庵 前庵主 堀内宗心宗匠
- 祝辞
細川家御当主 細川 護熙様
- 乾杯
細川 護熙様
- 鏡開き
- 祝電披露
- 祝の曲「那須与一・まほろば」
筑前琵琶奏者 上原 まり様
- 祝の舞 神楽「荒神・国譲り」
国指定重要無形民俗文化財財大土地神楽様
- 謝辞
二十一代家元 森山 宗浦
- 万歳三唱
九曜会会長 小林 祥泰
- 閉会のことば

続いて、宗浦新家元の師に当たる小堀泰巖老大師と堀内宗心宗匠の御両人から新家元へ対し、温かい励ましの祝辞が贈られた。祝賀会には、溝口島根県知事をはじめ政治・経済・宗教・文化の各界を代表する御来賓の皆様に参加して頂いているので、多数の御来賓の中から二十五名の代表の方々によって会場を盛り上げる鏡開きが正面ステージにて行われた。竹下巨衆議院議員、溝口善兵衛島根県知事、長岡秀人出雲市長等の代表が登壇し、五名ずつ五グループに分かれて五つの酒樽を囲んで、鏡開きが賑やかに豪快に挙行され、参会者から大きな拍手が送られた。参会者一同起立の中に、細川家御当主の細川護熙様から新家元誕生に対する祝意と期待のお言葉と乾杯の御発声があり、祝賀の宴が始まった。

賑やかな歓談が進むに従って、祝いの曲と舞が演じられ、会場は最高潮に盛り上がった。祝いの曲は、かつての宝塚スターの上原まり様の筑前琵琶の演奏、祝いの舞は、大土地神楽の皆様による出雲神楽の上演であった。

午後九時三十分、盛り上がった祝賀会は、森山宗浦新家元の決意と謝意の言葉と、小林祥泰九曜会会長の万歳三唱の発声によって終了した。

継承記念呈茶席

〈会 記〉

- 床 小堀泰巖老大師筆 宗浦
 - 花入 青磁
 - 花 季のもの
 - 立札卓 九曜紋透
 - 釜 富士形 道也 造
 - 水指 練上刳抜燻焼 月岡三郎作
 - 茶器 鶴蒔絵 東端真作
 - 茶盤 赤楽 不東庵作
 - 茶杓 堀内宗心作 共筒 銘 玉の緒
 - 建水 布地曲
 - 蓋置 宗育手造り
 - 御茶 宗浦好 天香の白
 - 御菓子 九曜紋味噌板 微笑庵詰
 - 菓子器 九曜紋高杯 竹香堂製
 - 宗瑞在判
- 当日、ホテル内の葵の間において呈茶席が設けられ、多くの参会者が利用し賑わった。
- なお、家元継承記念品として三齋公御手造り「宝珠香合」が細川護光様の御手造りによって写され、参会者へ贈られた。この香合は森山祥山宗匠が細川護立公より家元認可の際に、拝受した記念すべき品を模写したものです。

家元継承記念茶会を開催する

献茶式 — 出雲教神殿
記念茶会 — 出雲大社北島国造館
出雲文化伝承館

— 平成二十二年十一月二十一日(日) —



出雲教神殿 献茶式

継承式、祝賀会の翌日(十一月二十一日)は一転して晴れわたった秋空の好天気となり、献茶式が出雲大社の出雲教神殿で、記念茶会が出雲大社北島国造館と出雲文化伝承館で開催された。同時に出雲文化伝承館では、特別展「細川三斎とその周辺」が開催されており多くの参会者で賑わった。両会場をシャトルバスで往復する移動となったが乗車に時間待ちがない程の大盛況であった。

● 献茶式

○会場 出雲教神殿
○奉仕 二十一代家元 森山 宗浦

午前九時より静寂に充ちた御神殿において細川護熙様御夫妻を始め多くの御来賓のお客様をお迎えして、前日に家元を継承された森山宗浦三齋流二十一代家元の御奉仕により献茶式が挙行された。

式場は立見席が必要とされる程の超満員で、まず御神職によるお祓いの後、北島建孝国造様の祝詞奏上があり、続いて森山宗浦家元初の御神前での献茶のお点前の披露がなされ、献上された。

細川護熙様・佳代子様御夫妻による玉串奉呈に続いて御来賓代表、九曜会代表によって玉串が献上され、厳肅で和やかな雰囲気の中で献茶式を終了した。



松籟亭 濃茶席

● 記念茶会

○会場

- 北島国造館
- ・ 拝服席 亀山新館
- ・ 点心席 信徒会館
- 出雲文化伝承館
- ・ 濃茶席 松籟亭
- ・ 薄茶席 出雲屋敷
- ・ 立礼席 文化工房
- ・ 特別展 展示室

献茶式終了後、参会者は記念茶会の席へと移動、それぞれ茶席と点心、拝観とさわやかな出雲路の秋を楽しんだ。

松籟亭の濃茶席は、三齋流家元の担当席として新家元自らの御奉仕となり、多くの参席者で大盛況

であった。

美しい緑の出雲流庭園を眺めながら一服をと設けられた出雲屋敷の薄茶席は、表千家島根県支部の皆様のお好意による添釜で、このたびの記念茶会に華を添えていただき、大好評であった。

亀山新館の拝服席と文化工房の立礼席は、九曜会の担当席であったが、特に奉仕する九曜会員の道統継承への喜びに満ちた笑顔が印象的であった。

茶席の四席と点心席、特別展の各会場へ多くの来賓と一般参会者に、どのようにして混乱なく誘導して入って頂くか、これが記念茶会運営上の課題であった。また、これに来賓の帰郷時刻に対する移動の問題が重なって、苦心するところとなったが、来賓を六グループ別に編成して各案内係を配置、重複しないように移動コース表を作成して各会場へ誘導し、無事に予定通り移動ができた。

このたびの道統継承の記念事業は二日間にあつて開催され、また会場も松江市のホテル一畑と出雲市の出雲大社北島国造館と出雲文化伝承館の三か所に分かれているなど、その運営にはいろいろと配慮すべき点が心配されたが、綿密な計画と周到な事前打ち合わせ、関係者の協力によって記念すべき大事業を有意義かつ大成功に終えることができた。

協賛記念行事

特別展 「細川三齋とその周辺」

― 桃山から江戸初期・茶の湯の創造期の人々 ―

- 主催 出雲文化伝承館
- 共催 出雲市教育文化振興財団 出雲市、出雲市教育委員会

三齋流の道統継承を祝って、協賛記念行事として特別展「細川三齋とその周辺」が出雲文化伝承館を会場に、平成二十二年十月二十日から十一月二十八日迄開催され多くの観覧者で賑わった。

平成十一年に出雲文化伝承館では、「細川家茶道名品展」を開催して好評であったが、このたびは細川忠興（三齋）とその時代に焦点をあて、また出雲への三齋の茶の湯の伝播を紹介することとし、九十三点の名品が永青文庫、松井



特別展 展示室

三齋・細川家

- 細川三齋像
- 細川三齋 双馬図
- 細川三齋 和歌色紙「春たつと」
- 細川三齋 書状 采女宛
- 細川三齋 竹花入 銘二瀧
- 細川三齋 茶杓 銘青節
- 細川幽齋夫妻・休斎図
- 細川幽齋 書状 捻見院宛
- 細川三齋好 三標釜
- 細川三齋墓石の図 富岡鉄斎図



特別展 展示室

三齋周辺

- 千利休 書状 高山右近宛
- 千利休 書状 上林宛
- 千利休 茶杓 銘古今
- 古溪宗陳 法語
- 豊臣秀吉 茶壺の覚え
- 徳川家康 和歌色紙くれてゆく
- 古田織部 書状 紹巴老宛
- 織田有楽 書状 金地院宛
- 織田有楽 茶杓 共筒
- 清巖宗渭 黒梅
- 沢庵宗彭 法語 機関
- 千宗旦 竹花入 銘鹿鳴
- 千宗旦 古稀の文
- 千宗旦 茶杓 銘半 共筒
- 小堀遠州 句入書状 江月和尚宛
- 小堀遠州 竹花入 銘色替
- 徳川家光 木兔図
- 片桐石州 茶杓 共筒

茶道具

- 古染付花文首長花入 明
- 伊賀耳付花入 桃山
- 信楽三角花入 桃山
- 伊賀肩衝花入 銘苔清水 桃山
- 黄天目茶碗 根来天目台 南宋
- 古染付片身替山水絵茶碗 明
- 井戸茶碗 朝鮮王朝
- 青井戸茶碗 銘緑毛 朝鮮王朝
- ととや茶碗 朝鮮王朝
- 蕎麦茶碗 朝鮮王朝
- 井戸脇茶碗 銘女郎花 朝鮮王朝
- 刷毛目茶碗 銘偷閒 朝鮮王朝

- 三島曆手茶碗 朝鮮王朝
- 彫三島茶碗 朝鮮王朝
- 熊川茶碗 朝鮮王朝
- 釘彫伊羅保茶碗 朝鮮王朝
- 安南茶碗 ベトナム
- 長次郎 鉢開写茶碗 江戸
- 瀬戸黒茶碗 桃山
- 織部茶碗 桃山
- 志野亀甲文茶碗 桃山
- 唐津茶碗 銘夕陽 桃山
- 斑唐津茶碗 桃山
- 御本写茶碗 仁清作 江戸
- 伊賀耳付水指 桃山
- 朝鮮唐津水指 桃山
- 高取耳付水指 桃山
- 備前耳付水指 桃山
- 堆朱居布袋四重香合 明
- 染付兜茄子香合 明

いあいさつ

三齋流家元のご継承、まことにおめでとございます。心からのお祝いを申しあげます。

茶道三齋流は江戸時代に松江藩主・松平不味公が細川三齋公の茶の湯を敬慕されたのが縁で、出雲地方に伝わりこの出雲市へ伝えられました。観翠庵初代の森山祥山宗匠は昭和二十九年、細川家から三齋流家元を認められて以来宗瑞宗匠、宗育宗匠とその道統は継承され、この間三齋流茶道の普及に邁進され、さらに当市の文化事業に献身的にご協力いただきました。

このたび、宗浦宗匠が家元をご継承され、三齋流がますますご隆盛されますことを願ってやみません。

終わりになりましたが、宗育宗匠には多年にわたり当市の文化事業、とくに茶道文化普及には格別なご協力をたまりましたことを、厚く御礼申しあげます。

平成二十二年十一月二十一日

財団法人 出雲市教育文化振興財団

理事長 野津 邦男

出雲への伝播

- 祥瑞立瓜香合 明
- 南蛮王図香合 清
- 古染付象童子図鉢鉢 明
- 織部松竹文四方鉢 桃山
- 一尾伊織 竹花入 江戸
- 一尾伊織 茶杓 銘三番叟 江戸
- 稲葉正喬 茶杓 共筒 江戸
- 志村三采 「日午打三更」 江戸
- 志村三采 茶杓 銘初音 江戸
- 志村三采 水屋心得板額 江戸
- 荒井一掌 「茶是一味禪」 江戸
- 荒井一掌 竹花入 江戸
- 荒井一掌 置合の法 明治
- 荒井一掌 極秘目利書 江戸
- 観月庵恵海 三齋茶道心得 江戸
- 観月庵恵海好 若葉棗 江戸

出雲に伝わった茶道三齋流

和田 貞夫

戦国大名・細川忠興

細川氏は 鎌倉中期の足利義季を祖とする足利氏の一族であり、室町時代には管領職を務める家格で幕府の重鎮をなす有力大名であった。時代の推移とともに盛衰のあった細川氏であったが、再び中興に導いたのが戦国乱世を生き抜いた細川藤孝（幽斎）と細川忠興（三齋）の父子である。父子は文を尊ぶ武人大名であった。

細川忠興は天正六年（一五七八）に織田信長に仕えて越中守に任じられ長岡氏を名乗った。また織田信忠の一字を与えられて与一郎を忠興とし元服した。この時に明智光秀の娘ガラシャを娶っている。同八年に丹後十二万石を与えられて父とともに宮津城を築いて入った。本能寺の変では、光秀からの重ねての助勢依頼にも応ぜず、妻玉（ガラシャ）を離別し、羽柴秀吉と連絡を密にし弔い合戦に参戦している。以後、秀吉に仕えて出陣し多くの成功をあげた。

慶長五年（一六〇〇）関ヶ原の合戦では、細川忠興は東軍に組みして西軍勝利への戦功があったが、大坂玉造の細川邸が石田三成軍に包囲され、復縁した妻のガラ

シャは人質になるのを拒否し自害する。関ヶ原の戦いの功績に対し徳川家康より三十九万九千石を拝領し豊前中津城に入るが、後に小倉城を居城とした。

慶長九年に細川家の家督を忠興の三男忠利に相続させることを幕府は認めるが、しかしその後も元和六年隠居するまで藩の実権は忠興にあったといわれている。

加藤氏の改易とともに、寛永九年（一六三二）国替となり、細川忠利は肥後五十四万五千石を拝領して熊本城に入り、忠興も熊本へ入るが分領として八代に移った。正保二年（一六四五）忠興は、八十三歳で没し、八代城は重臣松井氏に預けられることになる。

茶人・細川三齋

茶の湯は、近世大名や武士にとって社交儀礼として心得ておかねばならない必須の教養であった。若い時から茶の湯に接する機会が多かった。天正九年、十九歳の与一郎（三齋）は、丹後宮津城内で津田宗及、山上宗二等の著名な茶人と接している。「三齋公伝書」によると「三齋初ハ薩摩屋宗二の弟子也」ともかく利休にも

学ばなくては」とあるので、初めは宗二に学び、ついで利休に師事したと思われる。

三齋と利休の交流については、現在残されている書状によって伺い知ることができ、中でも有名なのが切腹直前に、利休が京都から舟で堺に帰るのを、夕闇迫る淀の河辺で見送った三齋と古田織部への礼状である。「舟本にて見つけだし、驚き存じ候」と松井康之宛てに記し、見送ることが罪になる恐れがあった二人の心情を察した利休の思いの深さが理解でき、師弟関係を越えた深い心の交わりを知ることができる。

三齋の茶は、利休の茶を忠実に習得することを第一義とし、茶の湯に対する真摯な心構えと律儀さが高く評価されていて、利休の信頼も厚かったと言われている。奇抜な作意で知られる古田織部とは対局的であった。

松尾久重氏は「利休居士伝書」の中で「三齋は、利休の伝統を墨守した」と記し、中村昌生氏は「細川三齋と茶室」の論文において「三齋は、利休の茶の心を深く精神的に受け取って終生の嗜みとした人である。高桐院の松向軒は、利休の伝統に沿ったものである。」と述べている。三齋の茶の湯は、利休の教えを忠実に遵守した茶であった。

また、西堀一三氏は論文「細川三齋と茶道」で「最も洗練された天性として、荒き強きことをいかに表現しようとしたかが三齋の茶である」とし、強き茶の湯が三齋の茶の本質であると主張している。乱世を生きる戦国大名の茶の湯として利休の伝統を守りながら精神的強さを表出した強き茶を嗜んだのが三齋の茶の湯である。

しかし、三齋の茶の湯は後世、全国的に広まることはなかった。それは古田織部、小堀遠州や片桐石州のような職業的的茶人ではなく三齋が大名であったからだと言われている。織部は一萬石の小禄の大名で新しい作意で名を残しているが、大名の三齋には全くその必要はなかった。基本的に茶の性格が異なるのである。いたずらに作意に走った織部を三齋は強く批判していた。

また、記録によると徳川家康、秀忠、家光の三代の将軍に茶の湯を教授したことが窺える。そして家光は、茶会に招いて三齋のために自ら茶を点てたと言う。三齋のそれは、スケールの大きい大名の強き武家の茶の湯であった。

茶道三齋流

茶道三齋流とは、利休七哲の一人である細川三齋を流祖とする茶系である。細川三齋を流祖とする

茶系には、二つの流れがある。肥後藩の茶道を受け持った肥後茶道の三派（古市家、菅野家、小堀家）と、三齋に茶を学んだ江戸の一尾伊織が伝える門流の二つの流れである。

寛永二年（一六二五）古市宗庵が細川家の御茶道役として召抱えられるが、これが肥後茶道の祖である。古市宗庵は、利休の婿の円乗坊宗円に茶を学んだ。利休の秘法は、利休から宗円へ、そして宗庵へ伝えられ、後に宗庵は京都へ上がって宗旦に伝えたと言われている。

菅野家一世の菅野正的、小堀家一世小堀長斎いずれも古市宗庵に茶を学び肥後藩茶道役として細川家に仕えて、利休の茶法を守りながら三齋の茶を伝えた。

細川三齋を直系の流祖とする三齋流は、初代を一尾伊織とし一尾流または一尾派と言われているが、一尾伊織の門流は、稲葉駿河守正喬と米津周防守田賢の二つの流れに大別される。

一尾伊織は江戸の人で、三齋の臣佐藤将監に茶を学び、後に三齋に教えを受け、宗硯、一庵、徹斎、照庵と号し、元禄二年（一六八九）九十一歳で没した。一尾は稲葉正喬に伝えるが、正喬は正倚、含章、含翠、容軒と号し、禄高七千石の旗本で、出羽守、後に駿河守

大番頭となり正徳四年(一七一四)六十八歳で没した。その稲葉正喬に学んだ中井祐甫は、有隣齋と称し初めは秋元但馬守に仕え、後に有馬玄蕃守に仕えた。そして茶を志村三栄に伝えた。

三栄は三休、無事庵、不遠齋と号し、白隠禪師に参学して幕府の茶道となった。三栄の弟子が荒井一掌で出雲に伝わる三齋流の始祖と言われる人である。

荒井一掌

一掌は、本名を三郎兵衛と言ひ古帆、一青、宗音、閑市庵と号し、江戸の商家の生まれであるが、武士の血を受け武道を嗜む茶匠であった。若年より志村三栄について三齋流茶道を学び、真白子を授けられた後、仏法修業の必要を感じ、駿河国原の宿、松蔭寺に住する白隠禪師のもとで修業すること九年の後、白隠のもとを辞するにあたって手のひらに一の字を与えられて、それより一掌と名乗った。江戸へ帰り麹町に閑一庵を設けて、茶人人生を営んだ。

一掌は、当時の茶匠のなかにあつては学徳ともに備わった第一級の茶人であり、古法を良く伝えまた実践の人であつた。松江市普門院にある一掌晩年の画像は、長い白髭をたくわえ、眼光が鋭い容姿で古武士の風格がある。

松平不味と三齋流

江戸に続いた三齋流の道統が、何故に中央より遠く離れた出雲の地に定着したのか、不思議に思われる方が多い。三齋流が出雲の地に伝わったのは、松江藩の七代藩主、松平治郷(不味)との出会いによる。

不味は、幼少時より癩癪が強くて守役の手におえない人で老臣の言葉を借りると、「よく言つて上々、悪く言えば大変」といった具合で、将来の行末を心配して癩癪を正すために茶の湯の稽古を勧めたところ、これが大変気に入つて終生茶の湯にのめり込み、茶聖不味公と言われるようになった。

不味によると、「予若年、殊未熟の事なれども、幼少の時より此道をお好み」と言つており、若年の時から茶の湯に興味を持っていた。最初は、雲州茶道頭の正井道有に遠州流の茶を学び、また京都より千家流の谷口民之丞を呼んである。十八歳の時には、伊佐幸塚について石州流を学んだ不味であつたが、二十歳のときに書いた茶道論評「むだごと」の末尾に「本意能く知りたる師匠に稽古したまへかし、只閑市庵の先生こそが余の意にも違ふまし、此の先生に修業あれかし」と述べ、閑市庵(荒井一掌)を称揚している。

そして、家臣の高井又右衛門(宗

休)、林久嘉、矢島半兵衛(金鱗)の三名に命じて三齋流を学ばせたとする。(松平不味伝)

松平不味と荒井一掌との出会いは、何時、何処で実現したのであるのか、横井謙二郎氏は家臣の林久嘉の仲介であるとし、山野辺慶一氏は荒井一掌の師の志村三栄の仲介であるとしている。山野辺氏の見解は、不味の書師である志村三栄から弟子の荒井一掌を知つたといふ。いずれにしても接点の場所は、江戸であることは間違いない。

「列志録」によると、江戸滞在期間が林久嘉二十数年、矢島半兵衛十二年、高井又右衛門三年と記されておられ、三人の藩士が江戸滞在中に茶を通して荒井一掌と接触したとする説明は納得できる。一掌より林久嘉宛てた伝書が最も多いのは、林の江戸滞在が長く二人の親密の深さを示すものとして理解できよう。林久嘉の仲介説を取り上げることにしたい。

林久嘉は、松江藩医師であり宗智、宗順、春岐と号し一放軒閑々庵と称した。宝暦十三年に若殿様(不味)付の侍医となり、不味に日夜近侍して仕えており、当然茶の湯の話が二人の間に交わされて一掌のことが語られたであろうと思われる。こうして林久嘉を仲介として不味と一掌の出会いがあつたと考えてよい。そして、不味は

荒井一掌を師として遇するようになる。

明和七年十月五日付けで出府中の不味が国元の有澤能登に宛てた書簡の中に「流違ひ申候へとも一掌は殊の外大先生の様に被存候」と書き、自らは石州流を修めてはいるが、三齋流の荒井一掌は、大先生であると称揚している。不味の茶の湯は一掌との交遊によつて一層啓発されていく。一掌は、不味の参勤に随つて出雲の地に来遊し、三齋流の指導に当たつたと言われているが、一掌筆跡の「茶は一味祥」の落款に「於雲陽一掌書」とあり、雲陽とは出雲のことであるので、これが一掌の出雲来遊の動かぬ証拠となつている。

茶の湯を学ぶ人は「その本意を良く知つている師匠について稽古をするべきで、本意を知る宗匠は只一人、閑市庵あるのみ」と、不味は述べ一掌を高く評価している。そして一掌に対して親しく師弟の礼をとつたことが三齋流茶道を出雲の地へ定着させる大きな要因となつた。

荒井一掌から林久嘉へ

松江藩主松平治郷(不味)の家臣で侍医である林久嘉は、二十数年と江戸在勤が長く、江戸にて荒井一掌と出会い三齋流の茶の湯を学んだ。林家は、初代松平直政に

従ひ松江へ入つた信州松本以来の譜代の臣で代々久嘉を襲名し、「雲藩職制」を見ると百五十石を祿していることが明記されている。一掌は、林久嘉を介して不味に出会い、松江の地を訪れ林久嘉の家を拠点として三齋流の茶の湯の指導に努めた。一掌は、林久嘉に「閑々庵」「一放軒」の号を与え三齋流の興義を伝授したので、三齋流の茶の湯が出雲の地に定着することとなつた。

道統は普門院・観月庵へ

林久嘉とともに荒井一掌に茶の湯を学んだ松江藩の家臣高井草休は、一掌亡き後は林久嘉を師として学び、三齋流を出雲地方一円に広めていった。そして三齋流の道統を、一掌ゆかりの観月庵のある普門院第九世惠海法印へ伝えた。

松江市北田町の普門院は、歴代藩主の祈禱所として創建された天台宗の寺院で観月庵は、その普門院内にある。寺伝によると荒井一掌好みにより享和元年(一八〇一)天台宗普門院住職惠海法印による建立である。

不味も、時々、一掌に誘われて堀川から舟でこの席に臨んだと言われ、特徴としてこの庵には、二畳隅炉の席に深い庇(ひさし)がついていて、その露地の辺りは不味の賞するところであつたと伝え

られている。
席は二畳隅炉と四畳半の席を組み合わせてある。東側の腰のない二枚の障子を開けると東の空に出る月が眺められたので、観月庵と名づけられたが、現在は近隣に住宅が建ち庭の成長した樹木のために残念ながら月を眺めることはできない。

現在、松江市指定文化財、三齋流茶室観月庵として保存され、周辺は伝統美観保存地域となっている。また、普門院は文豪小泉八雲に関わる観光の地でもある。

恵海法印は、天台宗普門院の住職で観月庵を営み風月を友とし、三齋流の茶の湯を嗜んだ。

これにより三齋流茶道の道統は、普門院代々の住職によって観月庵を中心に連綿として受け継がれ、継承されていくことになる。

観月庵一世(恵海)以来、観月庵六世までの六代中、三代は安来市の清水寺住職が継承している。恵海が継承した後は、無所得庵円龍へ、そして得故庵恵教、制心庵真浄、花月庵教好、新々庵得忍と続くが、明治二十六年に得忍法印が示寂の後は一時無住となった。そこで三齋流の道統は、寺を離れて在家(俗人)の松江市川津町久保田松太郎翁(橋本庵梅屋)へと移っていった。やがて久保田松太郎翁から同じ川津町の木村宗七翁

(栖翠庵)へと道統は継承され、そして境港市の渡辺久治郎翁(郎庵宗世)へと受け継がれていく。

郎庵宗世は、普門院観月庵に住して流儀の普及に努めるが、晩年は境港市へ移って隠居し、海に近い畑の中に郎庵という茶室を営んで余生を送った。

その最晩年の郎庵宗世の門弟が観翠庵初代の森山祥山宗匠その人である。

観翠庵初代・森山祥山

観翠庵初代・森山祥山宗匠は、明治三十九年出雲市今市町に生を受け、若年時より茶の湯の修業を志し、観月庵において郎庵宗世に三齋流の茶の湯を学んだ。

茶道の各流派には、種々な免状があるが、三齋流には初伝と中伝の二種類の免状がある。入門修業して、最初に初伝七点前といって、ひと通り点前ができると初伝の免状を受けることができる。更に修業を重ねて一般的には五年から七年、もつとかかる人もいるが、中伝の免状を受けることができた。中伝を許されると、まず茶の道の一人前の資格があると言われているが、祥山の修業時には、中伝免状を受けた人は少なかった。その当時、山陰地方では二人か、三人しかいなかったと言う。中伝の奥は、免許皆伝しかなく、免許皆伝

所有者は一代の宗匠のうち、一人か二人あるかないかのものであった。

祥山宗匠は、昭和四年二十三歳の若さで中伝の免許状を受けている。中伝の免状を受けると師匠から庵号を頂くことになっており、郎庵宗世宗匠は祥山へ「観翠庵」と紙に書いて渡した。観月庵で修業したので観の一字を取り、また

姓の森山の森の翠が美しく栄えるようにと翠をつけて「観翠庵」と名付けられたのである。祥山宗匠

が中伝の免状を受けた頃には、既に六十人位の弟子があつたという。中伝を受けた機会にと、後援会が結成され、会長に九代遠藤嘉右衛門氏が就任、観音寺近くに家が新築され、稽古場も出来て門弟への指導にも熱が入っていた。

昭和九年、祥山宗匠二十八歳の時であった。境港市へ隠居している師の郎庵宗世宗匠より「最後の台子を伝えたい」との連絡があり師の草庵へ急行した祥山宗匠へ対して、清水寺住職等三齋流ゆかり

の茶人の立会いのもと、極真台子が授けられて、ここに三齋流の道統継承が実現した。台子の極意と観月庵恵海上人から伝わった十徳と中啓が三方に載せられて、流祖三齋公御尊像のままで宗世宗匠から祥山宗匠へと授けられたのである。三齋流を継承した祥山宗匠は、

観月庵へ入らず出雲市今市町に観翠庵を営み、門弟の指導に当たったので三齋流の道統は出雲市へ根を下ろすことになった。

細川家より家元の認可

道統を継承した祥山宗匠は、三齋流の普及発展に情熱を燃やし、精力的に茶の湯の研究に取り組み視野を広げていった。細川三齋の墓所である京都大徳寺の高桐院に

出かけて数年の間、止宿して京の茶風研究に取り組んで研鑽を深めた。このような努力の結果、細川家の御当主細川護立氏にお目通りが実現し、お点前を御覧頂くことができた。

昭和十九年秋に高桐院に於いて三齋公三百年遠忌が行われた時に、招かれてお点前を細川護立氏のもとより近衛文麿氏の前で奉仕し、近衛氏より「古武士の面影が出ていて、誠に清らかな点前である」とお言葉を賜ったと言う。

昭和二十九年十一月十一日、細川三齋公三百年遠忌が東京上野の国立博物館後庭、六窓庵及び応挙館で開催され、祥山宗匠が献茶のご奉仕をすることとなった。当日は、旧閑院の宮様を始め伏見の宮様、一条家、近衛家、細川家御夫妻様、三井家御当主を中心に財界の方など三百余名の御参席を賜つての盛大な法要で、高桐院上

田義山老師を導師とし、天下の名香「白菊」のかおりが場内にあふれる中で祥山宗匠が茶を献じたのである。

後日、祥山宗匠は献茶奉仕の栄を頂いたお礼の言上に細川家を訪れたが、細川護立氏には法要の盛会を殊の外お慶びになり「三齋流の茶の湯を立派に末永く後世に伝えよ」とのお言葉があり、三齋流家元を認めるとの認可があつた。

こうして細川家御当主より家元認可の書付と御自作の茶杓を賜ったことにより、三齋流は名実ともに家元観翠庵となり出雲市に定着することとなったのである。

細川家からの家元認可とともに細川家の家紋である「九曜」の使用が認められたのを機会に、三齋流の茶を学び修業する同志の組織「九曜会」が結成され、初代会長に山田美治氏が就任、小林文慶氏、大野弘幸氏、小林祥泰氏と会長が続いて今日に至っている。

発展充実する三齋流に活動の拠点をと、道場建設が進められ、昭和三十七年秋、出雲市渡橋町観音寺境内に観翠庵道場が竣工完成し、細川護貞氏の御臨席を得て祝賀記念茶会が盛大に開催された。昭和四十四年八月八日は、観翠庵にとつて誠に記念すべき光栄の年であった。常陸宮両殿下並びに同妃殿下の山陰地方御行啓の折、

観翠庵道場にお立ち寄りになり、お茶席に御光臨賜ったのである。茶の湯のおもてなしに殊の外お慶びになり、お迎えした関係者一同は光栄に浴したのである。

観翠庵の道統継承続く

昭和五十年十月十日、細川護貞氏御夫妻をお迎えして森山宗瑞家元継承と祥山宗匠古稀を祝う茶会が開催され、宗瑞宗匠は観翠庵二代として流派の発展に精励することとなる。宗瑞家元は、決意新たに神戸市の祥福寺僧堂へ掛塔し、山田無文老大師より得度を受けて参禅、修業を重ねた。

昭和五十二年、流派の隆盛に心血を捧げた祥山宗匠が逝去、宗瑞宗匠は名実ともに観翠庵第二代として、県内外へ積極的に攻めの茶を目指して振興発展に尽力した。平成六年、宗瑞宗匠が五十九歳の若さで急逝、関係者一同悲しみに包まれたが、細川家より観翠庵にて道統を継承せよとの思召しがあり、宗瑞宗匠夫人に家元認可がなされ、平成七年十一月十日細川護貞御夫妻の御来臨を得て継承式を開催、観翠庵三代森山宗育家元が誕生した。その後道統継承は順調に続き、このたびの三齋流二十一代観翠庵四代森山宗浦家元の道統継承となったのである。三齋流の益々の隆盛発展が期待される。



茶道三齋流の系譜

流祖 細川三齋(与一郎、忠興)

正保二年十二月二日没、八十二歳、法名・松向寺殿前参議

三齋宗立大居士

二代 一尾伊織(一庵、徹斎、宗硯、照庵)

初め三齋の臣佐藤将監に、のち三齋に茶を学ぶ。

三代 稲葉正喬(正倚、含章、含翠、容軒)

駿河守大番頭禄高七千石、著「一庵口儀」

四代 中井祐甫(有隣斎)

初め秋元但馬守に仕え、のち有馬玄蕃守の家臣となる。

五代 志村三栄(三休、無事庵、不遠斎)

旗本で幕府の茶道、白隠禅師に参学、著「茶道伝心録」

六代 荒井一掌(三郎兵衛、古帆、一青、宗音、閑市庵)

白隠禅師に参禅、出雲へ三齋流を伝える。

七代 林久嘉(宗智、宗順、春皎、一放軒、閑々庵)

弟子に松江藩家臣、林久嘉、高井草休等がいる。

八代 高井草休(又右衛門、長太夫、宗雪、米中、真祇、閑中庵)

松江藩家臣、寛政九年十一月十四日没、六十九歳、法名・是真院艸林自在居士。松江市内中原町大雄寺に葬る。

九代 観月庵惠海 観月庵一世(宗顕、得々庵)

松江市普門院住職、松平不味の指示により観月庵造営する。文政六年六月二十六日寂。

十代 無所得庵円龍 観月庵二世

松江市白濁天満宮境内松林寺住職。

十一代 得故庵惠教 観月庵三世

安来市清水寺蓮乘院住職、古材を以って古門堂を造る。天保十四年十月三日寂。

十二代 制心庵真浄 観月庵四世

安来市清水寺蓮乘院住職、明治四年十月七日寂。

十三代 花月庵教好 観月庵五世

安来市清水寺松寿院住職、明治八年八月三十一日寂。

十四代 新々庵得忍 観月庵六世(叡俊)

松江市普門院住職、同院内に新々庵を造る。明治二十六年十二月十八日寂。

十五代 橋本庵梅屋 観月庵七世(久保田松太郎)

松江市川津町住、大正二年三月三十日没。

十六代 栖庵宗七 観月庵八世(木村宗七)

松江市川津町住、大正六年一月十日没。

十七代 郎庵宗世 観月庵九世(渡辺久治郎)

境港市住、昭和十一年二月五日没。

十八代 観翠庵祥山 観翠庵初代(森山久太郎)

出雲市今市町住、細川家より家元認可を受ける、出雲市観音寺境内に三齋流道場・観翠庵(忘路軒、松霞亭)を建立。昭和五十二年二月十七日没。七十二歳、法名・観翠庵祥山普濟居士。

十九代 祥峰宗瑞 観翠庵二代(森山佳朋)

出雲市今市町住、妙心寺管長山田無文老大師について得度参禅する。昭和五十年十月三齋流道統を継承。

二十代 観翠庵宗育 観翠庵三代(森山育子) 出雲市今市町住

祥福寺管長河野大通老大師より安名拝受

二十一代 斗南宗浦 観翠庵四代(森山 充) 出雲市今市町住

建仁寺管長小堀泰巖老大師について得度参禅する。

平成二十二年十一月三齋流道統を継承し家元に就任する。